

# 浦幌町における蝶類の出現期

## ——特にタテハチョウ科について I ——

円子紳一

### ▼はじめに

まもなく春がめぐり蝶たちの季節になる。3月下旬から4月上旬の温暖な日には、成虫で越冬したクジャクチョウが、学名*geisha*（芸者）と名付けられたように、そのあでやかな姿を私達の前に見せてくれるだろう。

さて、『図説日本の蝶』（藤岡、1972）には53種のタテハチョウ科が記載されており、天然記念物に指定されているアサヒヒョウモンなど33種が北海道に生息しているとされている。そのうち道

東で確認されているのは30種であるが、浦幌町内では26種が確認されている。

今後、浦幌町内で発見される可能性があるのはオオイチモンジである。この種は十勝管内の各町村で確認されているし、釧路地方でも知られている。今後大きな期待のできるものである。

また、ヒオドシチョウとキタテハは、釧路地方での採集記録があるが極めて稀であり、偶然的な発見は考えられても、その可能性は非常に少ないと思われる。

種名	月別	5月	6月	7月	8月	9月	10月
ホソバヒョウモン			■	■■■			
カラフトヒョウモン		■■■	■■■				
コヒョウモン				■			
ヒョウモンチョウ				■■■	■■■		
クモガタヒョウモン			■■■■■	■			■■
ミドリヒョウモン				■	■■■■■	■■■	
メスグロヒョウモン				■■■	■		
ウラギンスジヒョウモン				■■	■■■■■	■	
オオウラギンスジヒョウモン				■■■■■	■■■■■	■■■■■	
ウラギンヒョウモン			■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	
ギンボシヒョウモン				■■■■■	■■■■■	■■■■■	

Table 1 ヒョウモンチョウ亞科の出現期

### 目 次

浦幌町における蝶類の出現期——特にタテハチョウ科について I ..... 円子紳一 ..... 2  
1910年代の浦幌（覚書）——特に『十勝国産業写真帖』を中心として ..... 後藤秀彦 ..... 5

表紙写真 十勝太Dチャシ跡：浦幌町字下浦幌東4線南80に所在し、浦幌川・十勝静内川が浦幌・十勝川に合流する地点の左岸河岸段丘上にある。標高33m。壕の過半は耕作と町道開削のため失なわれているが残された部分から推定すると、崖面から孤状の壕の端まで60m程あったものと思われる。旅来方面の漁獵の対抗と十勝川を遡る異民族を防ぐためのチャシといわれる。（後藤秀彦）

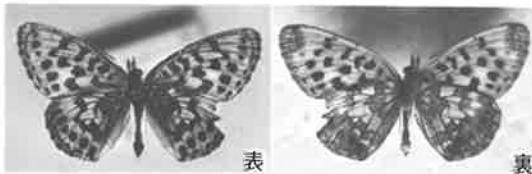
氷河期の生き残りといわれるアサヒヒョウモンは、大雪山塊のみに分布が限られており、浦幌町内での生息は考えられない。

今回は、タテハチョウ科の中でもヒョウモン類について報告し、考察を加えてみたいと思う。

#### ▼ホソバヒョウモン

*Clossiana thore jezoensis* Matsumura

採集地：常 豊 採集年月日：1964. 6. 1  
採集者：阿部 宏 浦幌町郷土博物館所蔵



北海道特産種で年一回の発生。6月から7月に発生するとされているが、浦幌町内では1964年6月1日、常豊で阿部宏氏が採集した1例があるだけである（円子、1976）。次種カラフトヒョウモンとの混棲も考えられるので、今後の調査に期待したい。

#### ▼カラフトヒョウモン

*Clossiana iphigenia sachalinensis* Matsumura

採集地：常 豊 採集年月日：1971. 5. 30  
採集者：円子紳一 浦幌町郷土博物館所蔵



北海道特産種。浦幌町内では5月下旬から6月下旬にかけて発生し、年1化。6月には局地的ではあるが、かなり多産する。

#### ▼コヒョウモン

*Brenthis ino mashuensis* Kono

採集地：常 豊 採集年月日：1964. 7. 2  
採集者：阿部 宏 浦幌町郷土博物館所蔵

年1回の発生。7～8月に出現し、道南以外ではごく普通に見られるとされている（田辺、1979）が、浦幌町内においては1964年7月2日の記録し



かない。食草がオニシモツケであることからも、是非確認したいものである。

#### ▼ヒョウモンチョウ

*Brenthis daphne iwatensis* Okano

採集地：平和 採集年月日：1976. 8. 1  
採集者：円子紳一 浦幌町郷土博物館所蔵



年一回の発生で7～8月に出現する。浦幌町内では稀な種である。

#### ▼クモガタヒョウモン

*Argynnис anadyomene mides* Butler

採集地：常 豊 採集年月日：1963. 6. 10  
採集者：阿部 宏 浦幌町郷土博物館所蔵



年1回の発生。6～7月に多く出現する。Table 1で10月上旬に出現したとあるが、これは1972年10月1日の記録である。『原色図鑑 日本の蝶』（白水、1971）によると、北海道西南部では短期間であるが夏眠し、東部では夏眠しないようだとなっているが、浦幌町内における出現記録が6～7月に集中しているながら、10月に発見されたということは、年によっては部分的に夏眠するものがあると想定される。

#### ▼ミドリヒョウモン

*Argynnис paphia geisha* Hemming

採集地：万 年  
採集者：円子紳一

採集年月日：1971. 8. 7  
浦幌町郷土博物館所蔵



表

裏

年1回の発生。7月中旬から9月中旬にかけて出現する。本州西南部では酷暑の頃に夏眠するとされているが、浦幌町内では連続的に出現し、夏眠の現象は見られない。

#### ▼メスグロヒョウモン

*Damora sagana liane* Fruhstorfer

採集地：帶 富 採集年月日：1972. 8. 6

採集者：円子紳一 中道嘉勝所蔵(神奈川県)

年一回の発生。浦幌町内では個体数が少ないようで、採集確認できたのは、上記の1度しかない。

#### ▼ウラギンスジヒョウモン

*Argyronome laodice japonica* Menetries

採集地：万 年 採集年月日：1971. 8. 7

採集者：円子紳一 浦幌町郷土博物館所蔵



表

裏

年1回の発生。九州などの暖地では夏眠するが、寒冷地ではない。浦幌町内においては7月下旬から9月上旬に出現するが、夏眠の現象はない。個体数の多い種である。

#### ▼オオウラギンスジヒョウモン

*Argyronome ruslana lysippe* Janson

採集地：千 歳 採集年月日：1971. 8. 7

採集者：円子紳一 浦幌町郷土博物館所蔵



表

裏

本種も暖地においては夏眠するが、浦幌町内ではその現象は見られない。浦幌町内での発生期は8月上旬から9月上旬であるが、北海道内の他の地域より遅れて発生するようである。年1化。

#### ▼ウラギンヒョウモン

*Fabriciana adippe pallescens* Butler

採集地：稻 穂

採集年月日：1973. 7. 1

採集者：松本尚志

浦幌町郷土博物館所蔵



表

裏

年1回発生。本種は浦幌町内に産するヒョウモンチョウ類の中でも発生が多い方で、6月下旬にはその姿を現わす。

7月下旬まで出現したあと、8月には全く姿を見せず、9月に入って再び出現する。8月中旬からは気温も下がり、夏眠するほどとは思えないがクモガタヒョウモンにも同じような現象があり、この2種については夏眠している可能性がある。

#### ▼ギンボシヒョウモン

*Mesoacidalia aglaja basalis* Matsumura

採集地：帶 富

採集年月日：1972. 7. 6

採集者：円子紳一

浦幌町郷土博物館所蔵



表

裏

本種は浦幌産ヒョウモンチョウ類の中でも、最も長い期間出現する。6月下旬に発生し、7~8月に多く、9月中旬まで姿を見ることができる。年1回の発生。

#### ▼おわりに

タテハチョウ科Iとして、ヒョウモン類11種について出現期の考察を試みたが、浦幌に生息して

いる可能性にあるヒョウモン類としてはこれが全てである。

*Clossiana* 属などの数種が6月に出現するが、ヒョウモン類が一番目に付くのは、8月から9月にかけてアザミの花を訪れる頃である。その名が物語るように、黄色地の翅に黒点がちりばめられたヒョウ（豹）の紋様が美しく、ミドリヒョウモンのように*geisha*（芸者）という学名が冠せられているものもある。

ヒョウモン類の多くはスミレ類を食草としており、山林が切り拓かれることにより陽当たりを好むスミレ類が増え、ヒョウモン類にとって好環境となることが予想されるが、カシワ・ナラなどの広葉樹が減少することによりゼフィルス類が絶滅する可能性もある。

北海道は、日本に残された唯一の自然状態の良好なところと言われるが、現実には私達をとりまく自然環境は、急速にその姿をかえつつある。身近かな自然を見つめ、保護する姿勢を大切に育てる必要性を痛感するこの頃である。

(浦幌町農業協同組合営農部)

※註：ほかにツマグロヒョウモンが1955年に八雲町で、1960年に札幌市で、メスアカムラサキが1955

年に新十津川町で迷蝶として採集された記録がある。

### 引用参考文献

- 飯島一雄 (1973) 「釧路湿原とその周辺の昆虫相 (III)」『釧路市立郷土博物館々報』 224 釧路  
 笠井啓成 (1980) 『池田町の自然・蝶類調査報告』 I 池田  
 白水 隆 (1971) 『原色図鑑 日本の蝶』 東京  
 西島浩・堀浩二・小野渢・田川康治・佐藤邦裕・  
 佐々木均 (1976) 「昆虫」『国見山自然  
 観察教育林の環境』 帯広  
 田辺秀男 (1979) 『北海道の昆虫』  
 藤岡知夫 (1972) 『図説 日本の蝶』 東京  
 松本尚志 (1975) 「浦幌町における蝶類の分布」  
 『浦幌町郷土博物館報告』 7 浦幌  
 ——— (1980) 『芽室町産蝶類ガイド』 芽室  
 円子紳一 (1973) 「浦幌町の蝶類レポート I」『浦  
 堀町郷土博物館報告』 2 浦幌  
 ——— (1976) 「浦幌町郷土博物館所蔵の阿部  
 宏氏の蝶標本」『浦幌町郷土博物館報告』  
 7 浦幌

## 1910年代の浦幌（覚書）

——特に『十勝国産業写真帖』を中心として——

後藤秀彦

### I

『十勝国産業写真帖』は、50葉からなる写真を収録し、若干のコメントを付して1911年7月27日に河西支局（現十勝支庁）が発刊したアルバムである。1ページに1枚の写真を掲載し、別葉にコメントを付している。

写真のサイズは、縦21.2cm、横27.1cmと大きく印刷も鮮明で当時の十勝地域の様子を余すところなく現在に伝えている。

筆者は、この書籍にふとした機会に接することができたが、今までこの本について本町の沿革史

等で触れていることがなかったので、ここに紹介し若干のコメントを付したいと思う次第である。

なお、この写真帖に掲載の写真のうち一部については、次の文献に転写されている。

- 『川流布史』（戸野部、1977）
- 『明治大正図誌5 北海道』（永井・小池・閑編、1978）
- 『浦幌町郷土博物館報告』12巻頭写真（後藤編、1978）及び収録論文（安藤・後藤、1978）
- 『浦幌町郷土博物館報告』13巻頭写真（後藤編、1979）